

IATSS三十周年によせて

間違っていた将来予測—エアバッグ開発の思い出

武田秀夫



1931年生れ。東京大学工学部を卒業後、日野自動車を経て本田技術研究所に入社、F1をはじめ初代アコード等乗用車の設計開発と、パワーステアリングやエアバッグなどのシステム開発を手がけた。82年、安全技術の研究成果が米国運輸省から表彰された。

IATSS発足直後の1978年に、自動車会社で働く私の仕事が突然安全技術の研究に変わり、そのうえエアバッグの開発責任者にも指名されてしまった。

エアバッグは作動がほんの一瞬で終わるため、火薬や推薬の助けを借りないと成り立たないシステムで、そのうえ衝突を感知する特殊なセンサーも必要となる。しかしこれらはいずれも従来の自動車とは完全に無縁のもので、同時に高度な技術を必要としたから、自動車という枠から一步も踏み出したことのない私は、正直言って途方に暮れた。

こうしたいわば個々の自動車会社レベルの悩みとは別に、エアバッグにはシステムそのものが抱える大きな問題があることが、開発の進展とともに私にも次第に見えてきた。どうということかという、エアバッグは確かに衝突から乗員を護れる優秀な装置には違いないが、ベルトを併用しない限り下半身の拘束が弱く、また姿勢の悪い乗員とか、前の窓にかじりついて外を見ている子どもに不必要な衝撃を与える場合があり、しかもこれらの問題を克服するには莫大なコストと長期の研究が必要という、困った状況にあったのである。そのうえアメリカの政府が乱暴というか単純というか、これらを努力により克服できる問題と割り切って、ベルトの助けをいっさい借りないエアバッグのみのレストレイントを短期間で普及させるべく一方的に立法手続きを推進したために、自動車業界がエアバッグを避けて、同じパッシブレストレイントには属するがおよそ快適性とは縁遠いパッシブベルトで法規に対処するかまえを見せていたのだった。

このような状況を横目で見ながら、私は自分なりの将来予測を立てた。それは自動車産業が、誰が扱っても問題が起きないエアバッグシステムを開発し終えるには少なくとも10年が必要で、さらにそれが不成功に終わって、エアバッグの実用化が半永久的に見送られる可能性がきわめて高い、というものだった。当時私は50歳そこそこだったから、10年たてばもう会社にはいない。その時までにはうまくいけば世の中にエアバッグが広まるが、その見込みはうすい、と考えたのである。

ところがその後事態は思いがけない方向に進展した。完全無欠なエアバッグを要求するアメリカのパッシブレストレイント法案が葬り去られてしまったのである。まさに道理が通って無理が引っ込んだのだ。それで自動車産業側が一気に活気づき、待ってましたとばかり通常のベルトとの併用をうたいつつ(これで下半身の拘束が一挙に向上)、またバッグに接近しないよう注意を喚起しつつ(これで子どもの問題が避けられる)、一斉にエアバッグを発売し始めた。こうして私がよくて10年、悪ければ半永久的と踏んだエアバッグ普及までの道のりは、わずか5年に短縮されてしまった。

自分の予想がはずれてがっかりしながらも、エアバッグの早期の普及に喜びを感じつつ、私はこの結末を我流で次のように結論づけた。いつの時代にあっても、飛躍的に便利な道具が出現すると、世の人々はまずその道具が生み出す弊害ばかりを声高に追及する。しかし時間の経過とともに誰もが冷静さを取り戻し、その弊害を直視してそれを避ける方法を考え出して、結果としてその道具は広く普及することになる。これこそは文明の進歩の基本的ステップでなくてなんであろうか。そして今またエアバッグにそれが起きたのだ。ああ人間とは、なんと賢い生き物なのか！